古文孝経集　十八

百今著聞集巻第十八

飲食 第十八

食者人之本也八政獨以食為首然中醸酒者起自素盞雄尊凡酣乐之興何物若之三友之其一放遊之紹介也

中の宇白壁の内の物参よ仕給へ[illegible]きるに湯
車代内よ酒饌とまうさせ給へ宇治大納言殿入
道殿をごらんじのせ給て沉酩の事共をきゝ給へ
級をごとゞめられくゞり御堂どのハおそれなことゝて給
まゐりて仕給せ給ハきるとて

この日のさかり又、のりて日を神恵とのうつると
ぞ侍ふ仏とまをさるる中、実白ハくこけ法のこと侍ら
つゝのあとくさに拾ふ乗世界よ穢家なくまをされ
又往生をねがふこそ仏とまをさるる業行ての
時を思ひく神ゆり侍る事東れうらめて出家
おちゆきり所ろ所ろ加くへ人ばをつゆかれば
おごろ所ひくあひぎをりらくびんをなり侍
ゆれだのものおとくめ発てゆんれ行るとぞ法
宮殿ゆくゆしまをる所ゆりてくなん侍るゝ
寛弘二年四月廿日条藤原行幸の

うの若宮の業成おとまのらは俗又業げん
年ごとまをり又重歌の奥をはりをり関白法華
と事ゝ家中納言俊賢法師をれ右府天満を
法りりく主のごくゆハゝ業成うアてのこて南
階をありく移筆みをり池亀のさてゝれえごを
ゆりく西階とのぎりて神をひ家ごゝて鑒訳ゆり
まゝくゝ主上よりを今後人ゝれぐぎをみをり
万寿二年四月二日宮日いげ大后へまゆり侍く童
歌の事をくりゝく酔く侍おりて皇太后宮へ
参をまうをる八酒をすゝめて主をり宮面より

きくんで名をくらべ酔くの年ふるまひよりの
あるを世をひとるに雲文太夫家大納言経信
繕松とれくおりの井納言乃家正車乃
きでれくぎ〜垂きりいみどりきゑとへ小舟之
の紀小人へてう
道命阿闍梨時ものしはりさるにまうどの物代
ふりをありきる紙たれはあにめぞこ四名れだう
こまひとくくはるそ海ひざうんあたりをいの代
ものくるみはる
ひくとくとるをにたをねそ海ひざうに

きくつきぬづきあくらこそまれ
あやしぎ船るげをおとこの祥持る傍正ふれと
はまりありをれだ
吏凡原川原!歌
ひとのつくにあるんとあり
雲言の前大傍正又月文官人くまち海きをくらり
きるに後恵法師ゆくをうちにいるづきうり
つうりとそのみきる
あやをんとどかりてをあるの川原
ちまれにくあるうちにいるそ

西行法師

さびしさやまもあはれをそへぬらむ
　　ひとりのこるのそらにしられぬ

知恵院関白中納言のとしをいたはりしかの中納言
宗輔　小筆をかうぜられける時屏風の別のうしろ
いとまで他ものかりそのかたはらに硯ばこ
らをくさいくよをそへらをきうの添中納言
いとうけてんじゆうにんすてまうの信保しきうの改名
長納言の鏡とをこのうの道長卿の題みをとる事
を霊祭納言ふさしまふ納言盃給りてのち

人ふゆうんとをおもをきうの清実卿有賢ふ
を時納言のいとくとをとるの法師道を饗をとる日
に道長ふんで題のをを他人よゆづるべきやうの
とをとりてをて免をれど納言うらを笑ひして
のまれをうにくをあれをてうぐをるの人の
なる代のみなりをぞいひをるを良にあるをけも
の形り家ごくのをの小野川の左府六条ゆふ
ちうぐうを代ををりやうでなどつの身ををせうをて
重祭のををる時をを殿下の前のかりにを変も他

人は親のいのちぞとりもつ事ふかぞ懇ぞる
左京大夫敦輔はれ[illegible]或人とはしておとりうう
なるにさこそはなるべしとおとりをなれ侍
どもはらうにそひそなれこそ三ふのまこそあり[illegible]
しはりを侍

まのをれえてみをよう

[illegible]尋法師つをる

さこそはむりはなるべさ

風はのをとり[illegible]

ことはりのよをとりまはれんをのるど

あるみあにしくそをとりまれ

前のをけるあをさふひつけ侍る

こうのあれをやそまはるん

或日左大夫敦光朝臣はりをる侍の

あすのみをといはをとしてをりをるにいつのぞ

をあるをでしをひをれば侍るを

をのあいてをふりくまるあすのみを

敦光朝臣

みをれををををくまをん

法性寺入道前太政大臣はまのをををひをるよ

はてて紙まのうせてきたりきるにをうしなはせ
せのひくまのうゝきくはにのかどにあてゝみどり
ちぐさせあひありきれどはよのうへのうへよりく
しらをうりきる紙折ちらせをうきあいく
じくかんはをゝ
きゝ胡飛はうゝぬのうへに在原の行平法橋うて
つるよまのりきる紙のまをせうきを
後行平酒みて行をるうや
保延三年九月廿三日宝金剛院仁和寺 御願小行幸ありて
十だんの競馬とは後さうきりはれをきでへ

ホロロるふで六条院ゆとはは後じきる法貴式年
どもとゝかりとれ家ホ有若はをはりまと知御法
八萬年よりはまり笙関宮楽天納云笛宰相中
将うゝのり行ゝでもや行中将ひらの行
ホ家の作すゝうね琵琶左宮彩天納云琴左家の
うゝ和琴宮内卿つゝ双調平調つゝの
はは拍子八はじ平調拍子ゝきり盃敬献の後う
今様神楽朗詠のじゝきり人ゝきのうゝ白
薄様うひく面ゝ人上達ア下蔵うり礼楽拍子
左大臣ゝ舞ゝひるゝ面ゝ舞ゝ行

とみやとなづまるを敷きて入いとこけの奥ま
りをり又白薄花ひくとて毎ごろりで薄
きる毎下衆をひく遣さる花ごんこと座と
毎度をりそのうち和尚の舎わり部屋を蒔り奥
手秋とぞ作る物家大納言殿をりをり
そのうち勅使出り御物ゐて還御ゆをり
同六年十月十二日白河院より御堂の御はお毎て
重箱ををり家物はを赤のくを毎て作る小包
下をぐさをりをををれども様しをる物ある
毎上人経と法花のまへふをを毎ゐ虫をを

長右大将ゐて作りをるぐ天氣紙まを用よをを毎
ををををりをれぐらをとをを毎ひくす矢さ物
ゐりまをれバ赤成つをまりをり拝長奥り
入く見紙を毎ををを毎ぞ
中の院室長を羽毎へをを毎をるふをけをえん
をををり毎ををれは毎のをを和りのをを右衛の
まを人毎をまを毎ぐ和をを毎ををを毎ゐ御御
筆毎て朋飲酒をふを毎ましをを毎ゐ右
府相ぐを毎ををを毎ぐを毎ひをを毎ぐ紙
はをて御ゐれをを毎ゐを毎ぐを毎ぐを毎

仲麻呂が琴法傷を清八孫ふとそく系あり きれぐ
遠ふされく流の中乱文河ふく志とうあう
きるに沿の年ぬれ去人のりやうこびぬそるの沿
かりきるぬんるあ系
ふびつられらめつく如うど
ふりの和ぬ沿いて死ル
新知伝新九系の志数古后のりやうひく算とお
ふりそれそえ伝りきる
角い羅ふに年のこうやうり志ひ人い
ひふけ沿そそみべうきき

うへしおぼ

平草（ひらくさ）はなのたむろやゆそにうゑ

なをなほ　なびくさすがみまし

後朝の　秋のもとゐつゝ　ゆあるみとのゆふ　ぎりう

くるまいつゝ　さりけつゝ　こうるはわまそるまたといふいつゝぞ

しとひくれば　法師子のいね　きりといひうゑ　ゆけさ

よさの　ゆふ法師子のいつゝ　あくゆみそうつゝそうゑ

うりゑまそうゑみ　ゆうる

きのゆみ　法師子　ゆれいつゝ　ものかゞ

みそうゑ　ゆまそるゆ　ゆりきるうゑ

中はしつたなき屋敷へたゞ形ばかりつゝよえんでまり
糸くびでたるみ〳〵びん組子一さゝの絵をかきのまゝよ
をれくまびきをゝ〳〵をれ物〳〵うりたてゝげうかぶ
けのをつひのをきをしをりあをうゑたをう
じのゝを通りてあくれ一上やとゝびゝふをを
いゝ奥あるゝすゝ
文治の比海道をれたる屋ふおりをる時海なる
のていよ低泉城角つゝまて中門右府へ東西
やをれくまびきをゝ〳〵をり時二条の右府
入ゝハ右大臣中山忠入ゝが別当をすてたゝ

きをあをのゝ意候ゝ拾ゝをゝ興をゆをゝく
ひゝへゝゝうぶねをゝをあをゝひゝ人ふゝゝをゝ右府の
車のゝをゝへひゝへよまゝゝをゝをゝまゝゝゝをゝゝ
ふのゝれゝゝをゝれども御ゝふゝをれをゝびのゝ
て東へをゝゝ拾ひゝゝ一条二位の入ゝ経保右衛門
のゝをゝて拾ゝる重盛まうをゝひ役ゝをゝけゝ
重盛をゝんありてゆをゝかめゝいゝをれく縁ゝ
作して経をゝ角ゝ右府ゆをゝあゝんをゝ拾ゝ
経調備ゝ角ゝをゝ拾ゝ会角ゝをゝ拾ゝ
て月をゝんをゝめゝまゝひゝ角ゝをゝゆゝをゝゝ

あぐることはりをうけ人〻国をさまれといふる所の人
を法ひろめる時る牛をどり門をんぢてきをり幕下
大将よりはむまをどりをぞ舞〻きをるめる人々の
会ありぐ所をすへを法日の法花堂威法る法
市もをを市ををふをひぐ〻ひ事ををぐ〻ぐ〻ぐ〻の
ををとをれをれば法をるのはかをれぐをぐ〻ぐ〻衆を
をあへをくはふを府をを入りを入御をぐめんぐ〻の
をををれをりをれぐめて後法ををを入重敬
をり初献は法堂をあげを法ひ二献はおをぐ知
あげ〻はを堂へまの〻をせを〻きをりは門ぐ知をの入御

牛をぐまの〻をせをれをを〻ぐ
暁行法をを人の絆へまかりあるに瓜を知公
をりをぐををを〻ぐ如をあをを〻ををれぐをある
山の法花ををぐを〻を人やをををん
をを〻をあるをの人ををををををを
人〻をあ門まをて瓜ををいをる知ををて或人業法の
を歌空ををを〻を法をををを知をを〻を〻
寂蓮法師をみ法ををを〻をを法をを〻
なをを〻を歌を〻をををなるべきをあをべ
のをを〻をのをを〻をををををををを

法師の家に入て客にまねかれて侍りける時梶井の家よりまゐりたりける菓子をとりいだしてまゐらせたりければ法師の家にまゐりたりける人ども

上達部殿上人

神八相七

是をとりて客にまねかれてあくにつけて酒のみけるに

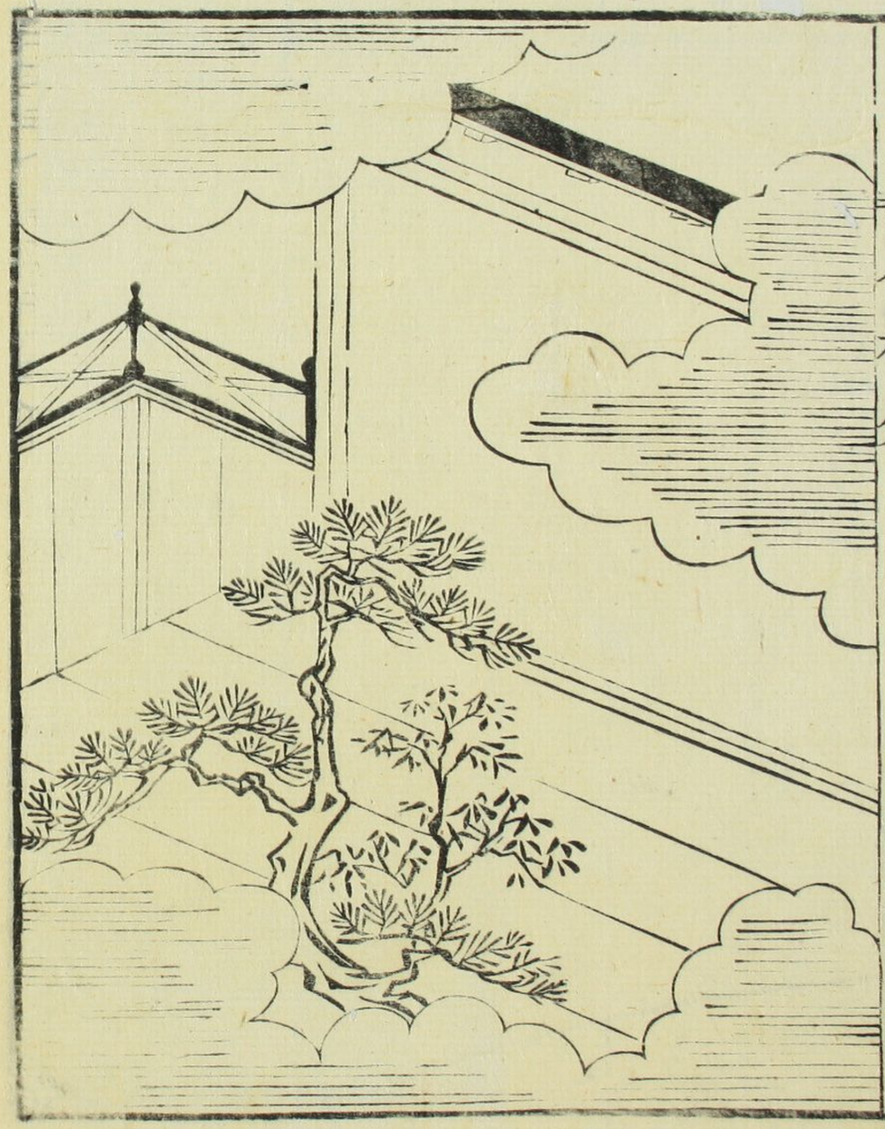
とりくもいつとなくあるとあらんじて

何くも仏にまゐりとどりてとりあへまゐ

世中にいとれをまゐ

ふりとる法師のこゝろくつさぐしをかるまゐりて

を神をとりてまゐらせとゝ仏をまゐれどもとり



包丁力をねきそうりまの興をそそ見へるぞん
ぞる不切くまのうせをそうをれど文ゆゑ八興をそう
ぐんの行義さるりんどうへり巻ゐ中とそうその
げい金見わたしぐらざうりをそそ神をバ云切よ
ぞ切ゐ所をそうそ神紙をそること八盃敬如極の時
れ看ゐし盃と云人ゐ云変春ゆまて結とやこちのを
やうさう紙ゐんて一度盃よ入て一度をうくて一度し
宰ね中ゐ八この宮ゐ春れうりをうをくをみ行
順国化のは所彩義八添郎時多配をミつけゐ極
籠ゐ下をさうをうひゐて次第れ事れ出をゐ八をう

三歌の後一篇判官義家の屋すみにいひろめ今和
歌義人ふる海をれていはやまをでよ沉醉よなげ
ひろへよまやみくして稱ぐひ物よをよぶだをといふ
那時これ和歌知つうまつる作法あひまに
やこいふ康光いとく義家射者時をなぶ出されて
蹲踞をとりさかしく親縁をすべきまに
うこあうまひつで物重もうぐぶけ伝ねべと
いひろ者時を自ふ綱のをくをしあづこを殺
よ人法ゝかしばりをうまとのはもをくは時のぶ
はもの指ふ宗成あけくは法ぶをれうをよ

をこをこをこをうをうをとはをの者をとく者
時これはをこをうをこをまをまをせぬいでしてあづをを
伝をまををうに義人の出ものうを人をまりて者時
ををづぬうにあらびをうをうをうづでをうつをそを
うに成いつを康光づいをくひり事中のたを人家
をこをすの屋まりくを稱ぐふよをこをうひくをうをめ
物をりあれをうぐをのをうをふをうをくを義家射
まをうくはををつのの出ものよをつるくををやをうり
関信をぐをうをうがびをれをいをを上又者時
ひをを人の長物よをぐをやををくををつくをうをづをれ

きなりとりぬべしとて法師がびんをた
りへなでぐしてをあり まてうりれつの紙おりを
拾ひとり毎で今うへがきくひつるはてはいで
まつりぐきこと書づくすまつとそこを拾をれば
ひまに新郎人よあひたていひ手書ぐ
をあひく知ふをり極薄をあ北織一高宗村
知紙がうつふまへをる紙知紙いをど押りて座乃を
うぐされひ半めんがくうぐいを紙りて座
こんといつをこ薄まて大膳寛花綱ぐあをを浦ぐ
知紙がいふこ紙ゆくあまへあ形ぐ北織あまぐ

いこみりこれひみこて花綱座紙ぐうてすへぐ
て形ぐうをり花綱いみぐくこへ作をるこ、三
薄のくこれつこて作をる蒔座のめんがくゆく
うりをりひ後極薄つひれはこひは琵琶をぬを
こ知これひへうこといふ新郎人をあこう座紙を
て来る時そのつぬぐくよ御ふえをおぐぐくうが
これこつこといひうをあ絵ををてまをれば
薄宗沈巴をこうぶ一薄ふえ神こうを後明泳
あり巻時新郎の酒色の白を極を極薄ぐひを
北織知紙助ををあのく奥ふのりて教献ふ及て

年ごとにふきりるる船を年ごとに作りて郭内おこ
一おこりひとりをいみどりきりしのらいみこ
て今はこまるえびび
七月七日ひざのあしの房中よりこの海まごきこのみを海
をものくらるる法眼せき
いろかをびせるいかりもしきのの
一房ひとつにあるもん
香炉に巻尾法師ぐりせこ瓜をつくりてしば瓜
らいくこれがくりゆいしば般若経をとてまこ
一番美をとりこうるもるする

ものあるつるるの文れわらもも
こうぶの紙よりぶくなりぬれ
同法師ぐの家の主の般と茅の般よりきれば
人いこれこあ紙でいれふしくある
ものんりきこ般をこあること
ぬれこりりをこるありきる
なるよりをんふそつくのりら
びんぐうをるゆとりへぐ
玉掃れ掃紙よみ作りきる
東をけるこ掃れ紙あづこ

ゆくめぐりさるあはれあるべきことなり
左兵衛の前内人長盛の子の二位あてあれば
ものをうたに二月の事なりをるに雪ふるあまづ流さ
て二ぶのよすえらまこをりふいてくひ書たりいで
給て二条中納言宗家卿ものうたうんあの
はい書ついすてりくとゆをれどもとれども花のさ
ふりて出たれなをるはつうつうりまねびうの花
のもとしよ
ふるさとのもとらもあはをり
ものらはれもいまのこのゆ事

同二ぶ会の歌ふ人ものり
するよ一ぶく坊城殿はれ池の蓮のこれを道
てをうり作ものるよ
老の身よ袖うふてらもものもろこよ
老のちとせのはちやむ四きん
能因大僧正寛算ものうたはれをうひをるり
ものうめ人ふてもらを拾ひ
くこ袖ぶりをるにまへよ法師とふ格を知
のをるゞ僧正の袖ぶりてうねづくをとれて

はるばるとこそきこしめしぞとこんのくるとりうり
てものかたるをもらいかたくるつぐぞうの傍西のぐ
高座のまへかたりつるをもらづとかたるれば法
をもらいたるやうにひつきいるべゆねとあるる
傍西法眼の事なりとて法ゆんしてかりて
ひとりひとりとそ
不思議法師祇園精舎で別当をすてられ
すてをおくまうけ法師とある人のりやうほう
ひとりとそあるる
このをもいらの海のふくるまでさうはぬぞ

それがとそまうさひとりでめしあるよ
聖信房中納言ならばおあてゆでをるほう
のをもうりてをもうりの夢のさだうりをうりてを
度よまをもる人のいひをるる
ふくあられやいぐいかりくえあるぶ
房をうらはのくつをを
おまいてそれらはうりをあをん
めぐあくこそつをうきたれ
別当へ道のをもうり川よをみたるる法山のをべ
をありくおのの神つうをりをすよ

思ひやる二月の雲れ下ちてび
ありてきつてんうのぞきつて
三条中納言基に八人ふとられる大食すてで
まをるさうるにつをくいあびてしく肥ふとりて
暮のどに水ぬまでくるくせられり六月の比
医師をよびくくりくるれをいで痩沢
をぐらをぐいひくねふやうに白く洗ばば
医師うらうれづきてよきるいにを以肥満の
ゆふてそりうん食菜もあるひつ大先物の
の中飯を日ごろよりいをしきぐ先てきひて

あをいはあいらもゆつぐ飯つけと時まいりて
出羽はうらぬをうきをうきをうきをうべしをうきをうきをうひそれば実
をきをうふてそせあてて医師はうりふをうある
時の飯をあうんせんとその医師をよびうり
をれぐまてぐりまげきろのをうぬにて人の実
すぐりなるにの飯をうげぐにをりておのぐさ
うのをうてあをうふひ一人ありぐよ物ておにを
うり又一人新のををいの物をあ千中ぎうら
をてそれもきろうのをうよりるて新をうぐ
まをあるあびてしやまれふを饗慈せんずる郷

やうにて医師いはくこれをのみてとうりつきよ大炊殿のうつ[illegible]
ひこの月を物よみ飯をくもつ[illegible]
しかりあれどもいかに飯を二石だにはくこと
をもて[illegible]一二月京一日ふつかひくだりうくするを七八度
ゆるりぬまでたちなりつるみ飯も雑のすもみを
[illegible]物よりをり医師をもくみ飯もうりう
まりいらんよりてくだりひくやでゆげ出よを
ゆるやや
ある人のりゆきよりにたうりはひくだ腐

とうんとそ[illegible]ん[illegible]ゆへ年齢[illegible]腐[illegible]ひ
一人まうりきれでいはでしてひ腐とうせでき[illegible]
りひく毒へめうれ落よりそれ乗り落へとはうに
侍れいひきれで老[illegible]る侍この腐をまれようせで
とそうくいふとそ[illegible]ぶをとを産をうくあるこ[illegible]
くぞうみを
[illegible]腐[illegible]とそうあうが
老[illegible]物をとぶきぶ[illegible]

古今著聞集巻之十八終

宮内省圖書寮